

# 全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

## 命ある水

岩手県 盛岡中央高等学校附属中学校 三年 澤井 佳恋

岩手県には、水の名所が多くある。龍泉洞のような観光スポットだけでなく、大慈清水、青龍水といった江戸時代から守り続けられている歴史ある場所、さらには中津川のように私自身の生活にも大きく関わっている場所まで、県内をみれば数えきれないほどだ。それと同じくらい、岩手県には全国的にも名の知れた文学者が多くいる。その中の一人として有名なのは宮沢賢治だろう。絵本や国語の教科書などで彼に出会った方も多いのではないだろうか。私自身も幼い頃から彼の童話や詩と親しみ、昨年は学校で宮沢賢治学習をしたことで、より彼の生涯や作品について深い知識を得ることができた。そんな岩手県で暮らしていると、ふと「あの先人もこの景色をみていたのだろうか」と考えることがある。例えば、滝沢市の柳沢湧口は宮沢賢治の詩集「春と修羅」の中で「あの柳沢の湧水」と詠われていることから、時代は違えど私たちのよく知る先人と同じ景色を見ている可能性も当然有り得るのだ。宮沢賢治は「銀河鉄道の夜」や「雨ニモマケズ」など沢山の名作を残しているが、「やまなし」をはじめ、水に関わる作品も数多くある。今回私が「水」というテーマと深く向き合うために参考にした作品は「青森挽歌」という詩だ。この詩は賢治の妹であるトシの死を詠ったものだが、この詩から「水」について考えたことがある。

それは「水」は私たち人間の生き方と、とても似ているということだ。詩の中で彼は、碧い寂かな湖水の面を見て「天のる璃の地面と知つて／こころわななき紐になつてながれる空の楽音」と表現している。ここには水の神秘的な様子がすべて表れているように感じた。水は山から川、海へ流れ、気体となって天に昇り、やがてまた雨として大地に降り注ぐ壮大な循環の中にある。その水たちの宿命は輪廻転生のようであり、私たちが持つ仏教的思想がそのまま形となって表れているように思える。しかし、私たちが本当に考えなければいけないのはこ

こからだと感じた。水は循環する。水は一度目に見えない状態になっても、必ず元に戻ることができる、本当にそうだろうか。確かに、自然な流れでいけばその法則が正しいものであることは間違いないだろう。だが、例外として当てはまるのは人間がその流れを壊してしまった場合だ。例えば東北最大の河川、北上川。北上川は現在、水の汚れの程度を示す水質階級はⅠと最もきれいな階級に分類され、非常に多くの生物が生息している。一方で、つい四十年前の北上川の姿は今とは全く別の川にも思えるほど悲惨な光景であった。その原因は松尾鉱山から流れた坑廃水。当時の人々は生活にかかせない貴重な水資源を自らの手で破壊してしまったのだ。もちろん意図してその結果になったのではない。しかし、ここでもう一度思い出してほしいことがある。それは、宮沢賢治の作品から感じた「水も私たちも似たような運命をたどっている」ということ。それはつまり、水と人間の命の価値は対等ということであると考えた。水の運命を変えてしまうということは水の人生そのものを狂わせてしまっていることと同義ではないだろうか。しかも、その結果はやがて私たちに返ってくる。これらのことを踏まえると、「水」という存在がどれだけ貴重であるかがよく分かるだろう。

水の無い生活を一度でも想像したことはあるだろうか。私には到底考えられない。川も湖も海も無い地球。それは果たして地球なのだろうか。雨が降らないということは虹を見ることもない。そんな人生は楽しいのだろうか。水が生きているから私たちも生きている。水は私たちの生きがいをつくっている。かつて先人たちが見た岩手の景色を守るため、水への感謝を忘れずに生活していきたい。